

特集 ナショナルオープン

JGA安西孝之会長が語る

「2006年度JGA主催オープンゴルフ選手権競技の主な変更点とその真意」

名実ともに 日本を代表する公式戦としての 環境を整備していきます

2006年度JGA主催オープンゴルフ選手権競技が大きく変わる。賞金額のアップ、第2ラウンドカットとなった選手への賞金配分、プロアマ大会の開催、出場資格の変更など、その内容は多岐にわたる。また、JGAオフィシャルスポンサーの採用なども新たに発表された。そこで今回は、安西孝之会長が、変更に至った経緯と意図を説明。併せて、野口正三競技委員長に変更の詳細を聞いた。また、男子選手会長である横田真一プロ、日本女子オープンの歴代優勝者のひとりである服部道子プロに選手の立場から今回の変更点を含め、ナショナルオープンについての思いを語ってもらった。

JGAは日本のゴルフ界の発展のために常にチャレンジしていかなくてはなりません。何かが起こることを恐れて、何もしないことの方が問題だと思います。

(財)日本ゴルフ協会 会長 安西 孝之

時代の変化に即した対応を
常に行うことがJGAの使命

先頃、ナショナルオープン3競技の変更点を記者発表されましたが、多くのマスコミが「改革」という表現を使っていました。しかし、安西会長の認識は少し違うと聞きました。

安西会長(以下、安西) 日本オープンゴルフ選手権競技、日本女子オープンゴルフ選手権競技、それに日本シニアオープンゴルフ選手権競技は、日本のゴルフトーナメントを代表する公式戦です。つまり、常にできる限りの努力を怠らず、名実ともに最高峰のトーナメントを目指し続けることが必要だと私は認識しています。時代の流れとともに、変化や変更が必要となることは必



ず出てくるものです。それをそのままにしておくことの方が問題だと思います。だから今出来る当然のことをやったという感想ですね。改革などという大それたことを行ったという思いは全くありません。

賞金額が大幅に上がりましたが。

安西 賞金が高いということだけで、権威ある大会ということは言えません。逆に言えば、昨年までの賞金額であっても、出場していただいた選手の皆さんには、ナショナルオープンに対して特別な思いを寄せていただいてまいりました。つまり「最も勝ちたい試合」「歴史に名を残せる大会」というような思いを持って、選手はナショナルオープンに参加してくれているのも間違いのない事実です。しかし、私たち主催者側の立場で、この選手たちの純粋な思いや評価に甘んじていたのではいけないと思うのです。やはり、賞金額においても日本最高のレベルに達する努力をすること。そして世界のメジャートーナメントに近づくことも大切なことだと考えております。賞金のことですから、今回の



変更で最も目立つ点なのかもしれませんが、私としては3つのオープン選手権競技をお預かりしている人間として、時代に則した今回の変更点のうちの一つとしか考えていません。

JGAオフィシャルスポンサーについてもお聞かせください。

安西 JGAという組織は、日本のゴルフ界の発展のために、常に努力していく責任があります。そのためにはゴルフ界全体をいつも見渡し、何ができるのか?何をしなければいけないのか?つまりゴルフ界発展のためのアイデアを休み無く企画することが大切なのです。そしてそれを実行する。そのためにはある程度の資金が必要です。そこでJGAの意思。つまり日本のゴルフ界の発展のために、JGAと考えを共有できる企業の協力を仰いだわけです。もちろん、ナショナルオープンの活性化を図るための賞金額の増額にも、寄与していただくことにもなりますが、それだけではないんです。JGAの活動全体に対するサポートをお願いします。それがオフィシャルスポンサーということです。ですから、どんな企業でも良いというわけではありません。何をあいても、JGAの活動を完全に理解していただける企業でなくては、意味がありません。

ゴルフ界の発展に寄与する JGAだからできるプロアマ大会を目指す

ナショナルオープンにプロアマが開催されることになりました。

安西 ナショナルオープンのプロアマ大会は、現在行われている一般のツアー競技のプロアマとは、性格がかなり違ったものになると思います。通常のトーナメントでは、主催企業の販売促進だったり、知名度のアップだったり、ビジネスをよりスムーズに行うことのツールとしてのプロアマが多いのではないのでしょうか。しかし我々が考えるオープン選手権競技のプロアマは、やはりゴルフ界の発展を最大の目的に開催されるものです。つまり、



一般のゴルファーに日本最高峰のプロたちをより身近に感じてもらうとか、ナショナルオープンの舞台を実際にプレーして感じてもらうことが一番の目的なんです。もちろん、選手にはファンに対する感謝をはじめ、トーナメントを開催するためにご協力いただいたすべての人たちに感謝する場になって欲しいと考えております。JGAだからこそできるプロアマ。一言で言えばそんなことを考えているのです。

参加資格の変更もありましたね。

安西 今年から、過去の実績はもとより、現在調子の良い選手が数多く出場できるよう参加資格を変更しました。もちろん、実績を軽く見ているわけではありません。ただ、少しでもエキサイトした試合となり、ファンの皆さまにさらに喜んでいただくためには、調子の上がっている選手がこれまでよりも、少し多く出場できるように変更したということです。この他にも、いくつかの変更点があります。それは野口正三競技委員長に詳細をお願いすると思いますが、今回の変更についてもいろいろな意見がありました。それを何度も何度も検証し、話し合い、今回の結論になったということです。もちろん、これですべてが整ったとは思っていません。また、変更したことで新たな問題点が浮かび上がってくるかもしれません。しかしJGAとしては、日本のゴルフ界の発展のために「良い」と思うことには、全力でチャレンジしていく必要があると思っています。また、同時に何かが起こることを恐れて何もすることが最も問題だとも私は考えています。これからいろいろなことにチャレンジしていきたいと思いますので、皆様のご理解とご協力を是非お願いしたいと思います。

今日はありがとうございました。

ナショナルオープンのさらなる発展を目指した変更

(財)日本ゴルフ協会
理事・競技委員会委員長 野口正三

JGAが主催するオープンゴルフ選手権競技は、出場選手、そしてファンの皆様からも、日本で最高峰の選手権競技として認識いただいていたと思います。しかし、これまで賞金額においては、世界的に見て、必ずしも最高レベルではありませんでした。そこですべての面において、要件を整えようというのが、今回の賞金額のアップだとお考えください。これにより、国内の選手のモチベーションもさらに高まることになるでしょうし、海外の実力のあるプレーヤーが、出場してくる環境も向上したと考えています。

また、36ホールカットとなったプロフェッショナル選手に対しても、日本一の座を競うオープン選手権競技に出場したことを称え、賞金を配分することといたしました。

出場定数の変更は、コースコンディションの良い9月末からの一ヶ月間をオープンマンスと位置づけナショナルオープンを開催しておりますが、季節柄、日照時間の問題もありますので、適切なプレー時間を確保するためであります。

参加資格については、今回日本ジュニア男女の15歳から17歳の部の優勝者に、新たに本選出場資格を付与いたしました。これは昨今のジュニア世代の技術向上が顕著となっていることや将来の日本のゴルフ界の発展を見据えた措置です。既に日本オープンで実施しておりますが、日本女子オープンにおきましても、2006年7月24日現在の賞金ランキング上位30名に出場資格を付与いたすことといたしました。これまでより5名増やしたことで、調子の良い選手が出場してくることになると思われます。

このように時代の流れに応じて、ナショナルオープンが例年以上の素晴らしい大会になることを願い、今回、いくつかの変更を行いました(変更点の詳細は5頁)。

もちろん、安西会長がおっしゃるような、これで完璧であるとは思っておりません。例えば、日本全国のゴルフファンを魅了する、選手が公平にその技量を発揮できる開催コー



スの選定などを含め、競技委員会と致しましても、ナショナルオープンのさらなる発展を遂げるように、努力を続けていきたいと思っています。

すべてが日本一の大会になりさらにやりがいを感じる

横田真一

伝統と格式、そしてタフなコースセッティング。やはり日本オープンが日本一を決める大会として私が最も重要視している大会のひとつです。そして今回、賞金額も日本の最高レベルになりました。選手としてはさらにやりがいを感じます。また、36ホールでカットされたプレーヤーにも賞金が分配されることについては、とても有難く、感謝いたしております。ジュニア選手の出場についても、日本オープンに出場することで、プレー面でも貴重な経験を積むことができ、また同時にマナー、エチケット、コースに対するいたわりなどを学ぶ良い機会だと思えます。



選手にとってもファンにとってもさらに素晴らしい大会になりました

服部道子

日本女子オープンは、私にとって自分が試される試合です。心技体のどれひとつでも完璧でないといふ歯が立たない。思い入れは強いですし、出場できることに對しても誇りを持っています。伝統、格式、榮譽、コースセッティングに関しては、これまで国内最高でしたが、今年からは賞金額も最高レベルになりました。ツアープロとして、これ以上ない幸せを感じます。もちろん、私以外の選手も同じ思いでしょうから、今年はいくら以上に厳しい戦いになり、ファンの方々も喜んでくれるのではないのでしょうか。また、ジュニア世代の選手に出場枠が与えられたことは、世界に通用する選手を育成するために、素晴らしいことだと思います。



2006年度JGA主催オープンゴルフ選手権競技の主な変更点

【賞金総額・優勝賞金】

競技名	2006年度 (賞金総額・優勝賞金)	2005年度まで (賞金総額・優勝賞金)
日本女子オープン	1億4,000万円・2,800万円	7,000万円・1,400万円
日本オープン	2億円・4,000万円	1億2,000万円・2,400万円
日本シニアオープン	8,000万円・1,600万円	5,000万円・1,000万円

【36ホールでカットとなったプロフェッショナル選手の賞金配分】

競技名	2006年度	2005年度まで
日本女子オープン	42,000円	0円
日本オープン	60,000円	0円
日本シニアオープン	30,000円	0円

・日本一の座を競うJGA主催オープンゴルフ選手権競技に出場したことを称えるとともに、当該競技の魅力を高めるために36ホールでカットされたプロフェッショナル選手に対して賞金を配分すること致しました。

【定員数の変更】

競技名	2006年度	2005年度まで
日本女子オープン	120人	132人
日本オープン	120人	132人
日本シニアオープン	108人	120人

・JGA主催のオープンゴルフ選手権競技は、気候が安定し、コースコンディションも良くなる9月末から1ヶ月間をオープンマンスと位置づけ開催しております。しかしながら、季節柄日照時間の問題もありますので、適切なプレ一時間を確保するため、定員数を変更致しました。

【参加資格の変更】

競技名	2006年度	2005年度まで
日本女子オープン	<ul style="list-style-type: none"> ・2005日本女子プロゴルフ協会ツアー賞金ランキング上位20位 ・2006年7月24日時点の日本女子プロゴルフ協会ツアー競技賞金ランキング上位30位 ・日本女子アマクオリファイイング上位3位タイ ・日本ジュニア女子15～17歳の部(優勝者 新規) 	<ul style="list-style-type: none"> ・2004日本女子プロゴルフ協会ツアー賞金ランキング上位40位 ・2005年7月18日時点の日本女子プロゴルフ協会ツアー競技賞金ランキング上位25位 ・日本女子アマクオリファイイング上位5位タイ
日本オープン	<ul style="list-style-type: none"> ・日本アマクオリファイイング上位3位タイ ・日本ジュニア男子15～17歳の部(優勝者 新規) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本アマクオリファイイング上位5位タイ
日本シニアオープン	<ul style="list-style-type: none"> ・日本アマ歴代優勝者で本競技第1日目の時点において満55歳まで(1950.10.27以降生まれ)のアマチュア。但し、この資格を利用するの参加は1名1回限りとする(新規) (対象者: 内藤正幸) 	なし

・定員数変更に伴う変更。

・昨今のジュニア世代の活躍に鑑み、日本ジュニア男女15～17歳の部の優勝者に新たに本選競技出場資格を付与致しました。

【予選競技の参加資格変更】

競技名	2006年度	2005年度まで
日本オープン (一次予選)	前年度日本女子オープンゴルフ選手権競技第3ラウンド進出者(新規)	なし
日本シニアオープン (予選競技)	前年度日本女子オープンゴルフ選手権競技第3ラウンド進出者(新規)	なし

・全英オープン、全米オープンにおいても女性への門戸開放を行っており時代の趨勢から、本年より日本オープンと日本シニアオープンについて予選競技から女性ゴルファーの参加を認めることとしました。なお、地区オープンへの参加は従来通り男子ゴルファーのみに参加資格が付与されます。

ナショナルオープンの歴史と伝統

日本オープンゴルフ選手権競技

日本人による日本のゴルフの創生と歩みに合致する日本オープン

今年で71回目を迎える日本オープンゴルフ選手権競技。その歴史はまさに日本のゴルフの歴史とリンクする。当初は日本在住の外国人の手によって産声を上げ、歩み出した日本のゴルフだが、日本ゴルフ協会の創立、日本オープンの誕生によって、日本人による日本のゴルフ文化がスタートしたと言って良いだろう。そこで日本ゴルフ史の中から、日本オープンの伝統をひもといてみることにしよう。

JGA創設から2年7か月の準備期間を置き 第1回日本オープンは開催された

1901年、神戸・六甲山の山頂に、英国人アーサー・ヘスケス・グルームが4ホール「神戸ゴルフ倶楽部」をオープンさせた。これが国内初のゴルフ場で、日本のゴルフの幕開けとなった。それから10年余りの間に、六甲山麓に「横屋ゴルフ・アソシエーション」、横浜・根岸に「ニッポン・レース・クラブ・ゴルフイング・アソシエーション」、長崎の雲仙、兵庫の鳴尾といくつかのゴルフ場が産声を上げている。

しかし、すべてが日本に住む外国人が造ったゴルフ場であり、一部、日本人にも開放されてはいたが、やはり排他的な雰囲気は否めない。そこで「日本人による日本人のためのゴルフ場を造ろう」という機運が高まり、1913年、後の日銀総裁、蔵相を歴任する井上準之助らが中心になり、東京・駒沢に「東京ゴルフ倶楽部」が設立されたのである。

同倶楽部創設と同時に同倶楽部のメンバーは、六甲や根岸などの外国人と積極的に対外試合を行い、その腕とコース、そして日本人ゴルファーの存在を強くアピールした。1907年から始まった日本アマチュア選手権の第12回大会(1918年)では、それまで外国人が独占してきたチャンピオンの座に、井上信が初めて座り、日本人ゴルファーのレベルが上がったことを示すまでに至ったのである。

こうした流れの中、1924年、神戸、根岸、東京、鳴尾、舞子、程ヶ谷、六甲の7クラブの代表者が集まり、ジャパン・ゴルフ・アソシエーション(JGA=現・日本ゴルフ協会)を創設。これで日本国内のゴルフ界

は、完全に日本人がリーダーシップを持つこととなる。それまで在日の外国人が主催していた日本アマチュア選手権をJGAが継承。さらに、日本オープンゴルフ選手権と関東、関西地域対抗競技を創設することを決定。その準備のためJGAコミティーの大谷光明が渡英し、制度やアマチュアの参加資格を決めるナショナルハンディキャップの導入のため調査を行った。そしてすべての準備が完了し、第1回日本オープンゴルフ選手権が開催されたのは、JGA創立から2年7か月後。1927年5月28日と29日の二日間、程ヶ谷カントリー倶楽部で、1日36ホールの72ホール・ストロークプレーで開催されたのである。なお、第1回大会の参加資格をみるとアマチュアは、ナショナルハンディキャップ8までのプレーヤー。プロは所属倶楽部のオナラリー・セクレタリーによって推薦された者。この規程にしたがって参加した出場者は、アマチュア12名・プロ5名であった。

歴代チャンピオンにはゴルフ史に 名を残すビッグネームが勢ぞろい

「日本オープンをアマチュアとして唯一制したプレーヤー」として知られる赤星六郎が、第1回大会の優勝者であった。しかし、当時の事情からすれば、アマチュアの赤星六郎の優勝は当然のことだった。赤星六郎は、言わば当時のプロが生徒なら大先生。アマチュアがプロを教えていた時代であり、その実力の差は歴然だったからだ。ちなみに、福井覚治、村上伝二、柏木健一らのプロは「日本オープンに出るだけの腕がない」と、倶楽部のセクレタリーから推薦を受けられず、第1回日本オープンには出場できなかった。



第1回日本オープンで優勝したアマチュアの赤星六郎

翌年の第2回大会では、プロの浅見緑蔵が優勝した。しかし、コース設計家を志していた赤星六郎が渡米して、勉強に励んでいたため日本オープンを欠場したのが、プロの優勝の大きな要因だったと言われている。その理由は、未だに多くのプロがアマチュアに齒が立たず、出場すらできない状況が続いていたことから、容易に想像できるのである。

しかし年を重ねるごとに浅見や宮本留吉、安田幸吉らのプロが着実に実力を上げ、アマとプロの実力が接近、そして逆転することになる。1935年の第8回大会が行われた東京ゴルフ倶楽部朝霞コースは、アメリカの一流プレーヤーを標準に、英国の設計家ア

リソンが造ったコース。ここで宮本がオープン史上初の300ストロークを切ったことは、当時の世界的レベルから見ても、かなり優秀なスコアと言うことができた。

その後、戸田藤一郎、林由郎、小野光一、中村寅吉、小針春芳らの日本ゴルフ界の歴史に名を残す面々がチャンピオンの座についている。また、杉本英世、河野高明、村上隆、杉原輝雄。さらには青木功、尾崎将司、中嶋常幸といった時代時代の日本を代表するプロたちが、日本オープンチャンピオンとして名実ともにトップスターとして君臨している。逆説すれば、彼らがナショナルオープンである日本オープンの舞台上で大活躍したからこそ、ビッグネームとして名を馳せたと行って良いだろう。

このように日本オープンの創生と歩みは、日本人による日本のゴルフの創生そのものという一面を持つ。現在は、上位選手が拮抗した実力を持ち、日本オープンの優勝者の名前は毎年のように変わっている。先人たちの継続的な努力のおかげで、最高の伝統と権威を、出場選手はもとより、多くのファンの方々から認められている日本オープン。その舞台上、卓越した実力を見つけた者が、新たなビッグネームとして、日本のゴルフ史に名を残すことは、過去の歴史から見て間違いない。だからこそ、常に時代にマッチした対策や変更が必要なのである。

日本女子オープンゴルフ選手権競技

世界に通用する選手を育て上げた 日本女子オープンゴルフ選手権競技

それはわずか40年前の話である。日本に誰が女子のゴルフ競技が定着すると思ったであろうか？ しかし、日本女子オープンゴルフ選手権競技の創設をきっかけに、選手の実力は急激に向上。今では世界の舞台上で堂々と勝負できる日本人選手が何人も誕生している。それと同時に、世間に女子ゴルフの素晴らしさ、そして女性にゴルフの楽しさをアピールしたのも、日本女子オープンゴルフ選手権競技である。まさに「ナショナルオープンが日本の女子ゴルフを育てた」と言っても過言ではない。

ナショナルオープンの創設が 日本に女子ゴルフを広める 原動力となった

日本のゴルフ界は、その草創期において、アマチュアがプロを育てて来た。女子の場合も同様だが、

1960年代後半になっても、その傾向が続いていたと言える。それは、1968年、JGAが後援しTBSが主催した第1回日本女子オープンゴルフ競技開催に至る過程で「女子プロがどれだけの技量を持っているのか」「アマチュアのご婦人の方が強いのではないか」「アマチュアの上流社会のご婦人はプロと一緒にラウ

ンドすることを嫌うのではないか」などという今では想像もつかない心配の声が上がったことでも想像がつく。つまり、当時の女子ゴルフ界はアマチュア全盛期だったのである。

しかし実際に開催してみたら、アマチュア43名、プロ55名が参加。優勝は中村寅吉プロの愛弟子であった樋口久子。これで女子プロゴルファーの存在が、大きく世間に知られることとなり、TBS主催の日本女子オープンゴルフ競技は3年間続いた。そして1971年からはJGAが主催となり、名実ともにナショナルオープンとなった日本女子オープンゴルフ選手権は、今日に至っている。

さて、第1回大会から十数年は、樋口久子に勝つのは誰か?というのが日本女子オープンゴルフ選手権の興味だった。実際に樋口は4連覇、2連覇を含み、第13回大会までに8勝している。樋口の優勝を阻止したのは、佐々木マサ子、小林法子、二瓶綾子、清元登子、吉川なよ子と第14回大会の大迫たつ子の6名である。彼女たちもそれぞれ、樋口とともに日本の女子ツアーの草創期を築き上げた名選手たちである。

その後、日蔭温子、塗阿玉、森口祐子らが活躍を見せ、岡本綾子に続く。またジュニア出身で、世界女子アマで優勝した実績を持つ服部道子が2勝していることも、特筆すべきであろう。さらに、全米女子プロ優勝の樋口。アメリカ女子ツアー賞金女王の栄冠に輝いた岡本。アメリカ女子ツアーで優勝経験

を誇る小林浩美など、日本女子オープンゴルフ選手権競技の覇者は、世界でも十分通用する実力を身につけている。つまり、わずか40年前には、上流階級のご婦人方と、その実力を比較されていた日本の女子プロたちが、このナショナルオープンの創設とその後の歴史の中で、世界に通用する実力を急速につけていったことになる。

そして21世紀。ジュニア世代から育って来た若手たちの台頭の中で、圧倒的な強さを見せている不動裕理が2004年の大会で初優勝。そして昨年は宮里藍がこれまた初優勝し、ナショナルオープンの歴代優勝者に名を連ねることができた。

このように日本オープンゴルフ選手権競技同様、女子の場合も、歴代優勝者を見渡すと、日本の女子競技ゴルフの歴史が手にとるように蘇ってくる。やはり、すべての選手が真剣に優勝を目指し、その時最も強い選手が栄冠を手にする。それがナショナルオープンである日本女子オープンゴルフ選手権競技にも、はっきりと現れている。



日本女子オープンの前身であるTBSオープンに優勝した樋口久子

日本シニアオープンゴルフ選手権競技

ナショナルオープンのタイトルの重みを知り抜いた選手たちの戦い

歴史の浅い日本シニアオープンゴルフ選手権競技だが、今後、日本オープンゴルフ選手権競技で熾烈な戦いを繰り広げた選手たちが続々とシニア入りする。彼らこそ、ナショナルオープンの重みを誰よりも知っているだけに、今後毎年歴史に残る名勝負が繰り広げられるはずである。

昨年優勝の中嶋常幸が涙を見せたタイトルの重さ

ナショナルオープンの中で、最も歴史が浅いのが日本シニアオープンゴルフ選手権競技である。1991年

に第1回大会が開催され、今年で16回目を迎える。第1回大会から第3回大会までは金井清一が3連覇。その後、青木功が4連覇し、その後はグラハム・マーシュが2連覇と、第9回大会までは3人のチャンピオンしか生まれなかった。そしてその後の5年間は、

高橋勝成が3勝と、限られた選手たちで優勝を独占してきた傾向が伺える。

しかし昨年、シニア入り2年目の中嶋常幸が優勝。世間の注目が、一気に日本シニアオープンゴルフ選手権競技に向けられた。それはギャラリー数、テレビの視聴率を見てもあきらかである。

つまり、日本オープンゴルフ選手権競技で、かつて大活躍したビッグネームたちが年を重ね、シニア入りしたことで、選手層が大幅に厚みを増し、さらに高いレベルの戦いが繰り広げられるようになったことが、日本シニアオープンゴルフ選手権競技の注目度をあげた最大の要因であろう。また、昨年優勝した中嶋が涙

の優勝インタビューの中で「これで日本と名の付くタイトルは日本プロシニア以外すべて取ることができた。とても嬉しい優勝」と、シニア入りしても、ナショナルオープンのタイトルに執着を見せている。

今後、この傾向はますます強まることが予測される。レギュラーツアー時代、ナショナルオープンのタイトル奪取に強い執念を見せていた選手たちが、今度は日本シニアオープンゴルフ選手権競技のタイトルを必死に目指して出場してくるからである。ナショナルオープンの重みを全身で知り抜いている彼らだけに、今後大会はさらに盛り上がっていくことになる。

何故ナショナルオープンは選手たちの闘争心をかきたてるのか？

ナショナルオープンのコースセッティング

選手の置かれた立場やショットの結果で様々な場面が展開するセッティング

(財)日本ゴルフ協会 理事・競技委員会委員長 野口正三

まず第一に舞台となるコースの特徴を最大限に尊重すること。そして、それぞれのホールの特徴を生かすことを念頭に置き、コースセッティングのプランを作成します。その基本となる考え方は、日本一を決める試合に出場してくる選手の技術を、すべて出し切ってもらふセッティングです。ロングドライブもしかり、正確なショットもしかり、トラブルからの脱出の技もしかり、アプローチ、パッティングの読みや技術もしかり、そしてコースを攻めるプランニングもしかり。つまり、ゴルフという競技において必要とされるすべての技術や能力を引き出すためのコースセッティングを目指すことが、ナショナルオープンのセッティングということです。

だから、ロングヒッターに特別に有利だとか、ただ、冒険をせず、守っていればスコアが作れるといったコースセッティングにならないように、細心の注意を払っています。

ナショナルオープンの使命は、その年の日本一のプレーヤーを決定するという要素を持っていますが、その他に、ギャラリーの方やテレビの視聴者の方々に、ゴルフ競技の素晴らしさや楽しさ、奥

の深さを味わってもらうことも大切な役割のひとつと考えています。それには、素晴らしいパーディーも見ていただきたいし、トッププレーヤーならではのリカバリーショットも目の当たりにしてもらいたい。また、勇気を持った積極的な攻めと同時に、必死に我慢し、スコアを守り抜く選手の姿も、ゴルフを観戦する醍醐味のひとつだと思います。だから、闇雲に難しすぎるセッティングだけに固執するのではなく、もちろんその逆もしかりですが、プレーヤーの置かれた立場やショットの結果によって、様々な場面を目にすることのできるセッティングが必要と考えています。



開催コースの特徴を生かすセッティングが基本